

図書館員の四季

やりがいのある仕事

大垣市民病院 高田たみ代

私が図書係として採用されたのは昭和53年春のことです。引き継ぎも説明もなく「資格を持っておられるので図書のことはすべてお任せします。」という言葉とともに広い図書室に案内されたのです。初めて見る医学用語に戸惑い、早速、単語帳を作らねばなりませんでした。就職したというより大学へでも進学したような毎日でした。

間接奉仕中心の日々の業務の中で、患者サービスの必要性を感じるようになり、平成4年11月には夢であった“あすなる文庫”を中央廊下に開設することができました。本の貸出、返却はセルフサービスによる記入式で係りが行うのは書棚の整理、本の入れ替え、寄贈図書の受入、利用統計などです。入院患者さんはもちろん診療、検査の待ち時間を利用して1ヶ月約1500冊の貸出があります。午前中の職員の出入りの少ない時間帯に文庫の業務を済ませ、午後は依頼を受けた文献検索、相互貸借に力を入れ両立を図っています。

この3年間、異動で診療科の受付に出ていました。忙しく働く職員が図書室に出向くには必ず目的があつてのことゆえと痛感し、全力で対処していかなければと、決意を新たにしています。

CD-ROMのような検索機器の出現により大いに活躍できることと、図書室で時間を忘れ日々過ごせることに感謝しています。

四半世紀めの初心

松山市民病院 高須賀京子

病院図書室の仕事を始めもう四半世紀もたってしまいました。毎日の業務をこなして行くことに汲々として、新しい知識を取り入れてゆく努力を十分にやりこなせないまま、時間だけが経ってしまいました。

製本雑誌の受け入れ業務も、もう少しで終わり、それでも次の仕事へと、今年は少しだけ新しい心意気でいます。学生時代からの希望が、図書館の司書の仕事でした。しかし、病院の図書室とは思えないものでした。が・・・。

私事でお恥ずかしいのですが、年末年始を利用して初めての海外旅行を計画しました。目的地も初心者むけのハワイ。喜び勇んで空港から機上の人となり、初めての機内食を食べ一息ついたその途端、乱気流に巻き込まれ一気に急降下、通路に放り出されてしまいました。機内は剥がれた天井、ぶら下がる酸素マスク、この事故で不幸にして一人の方が亡くなられました。

製本雑誌受け入れという年中行事を一つ終え、忙しい毎日とはいえ、好きな仕事ができることに感慨深いものがあります。

